

市指定重要文化財 旧和田家住宅



写真（上）：南東から撮影

写真（下）：北西から撮影

旧和田家住宅の普請と職人

小沢 朝江^(※1)

1 はじめに

旧和田家住宅（図1, 2）は、茅ヶ崎市堤に所在する大規模民家であり、現在は市の民俗資料館として活用されている。幕末期の安政2年(1855)4月に上棟したこの民家は、元は同市萩園に所在したが、昭和57年(1982)に市の重要文化財に指定され、昭和60年(1985)に所有者である和田久徳氏から市が寄贈を受けて、現在地に移築された。

旧和田家住宅は、文化財指定の趣意書によれば、桁行11間半・梁間5間半の大型民家であること、幕末期の民家の特徴を良く備えていること、良材を用いた質の高い造作であること、改造が少なく、よく当初の様子を残していることが指定理由として挙げられ、さらに「普請帳」と呼ばれる資料が現存することが重視されている。「普請」とは、広くは「建物を建てること」を意味し、江戸時代には建築の造作を「作事」、土木工事を含む幅広い建築行為を「普請」と呼んで区別した。「普請帳」とは、材木など材料の購入記録や、職人・人足の出勤記録など、普請に関わる人と金銭の動きを記録した文書を指し、和田家の場合『職人日記帳』など6冊が現存し¹⁾、建物と合わせて具体的な建設の様相を知ることができる。

この普請帳については、昭和60年の移築の際の報告書²⁾で田中文男氏が一部検討されているが、建設経過に関わる内容を中心とする。これによれば、嘉永4年(1851)12月に材木買い付けを開始したこと、安政2年(1855)4月に上棟し、この年の暮には造作の大半が完成したこと、その後文久2年(1862)頃まで工事が断続的に続けられたことが指摘され、準備から完成まで足掛け12年を要したことが強調されているが、詳細は論じられていない。

ここでは、6冊の普請帳を元に、和田家住宅がどんな人々によって建てられ、材料がどのように調達

されたのかなど、普請の様相を人・モノの動きと周辺地域との関係に注目して検討する。

2 普請の工程 ―普請帳の記録から

まず、『職人日記帳』『造作職人帳』の2冊に記載された職人の出面（出勤状況）から、普請の経過を改めてみてみよう。2冊は、前者は嘉永7年(1854)11月から安政2年4月20日まで、後者は同日の屋根葺き開始以降の記録であり、職人として大工・木挽・石屋・左官・屋根屋・畳屋・建具屋の7職種が登場する。

最初に仕事を始めたのは木挽^{こびき}で、嘉永7年11月22日に「初メ」とある。木挽とは、伐採した木を板や角材に製材する職人で、明治中期以降機械製材に移行するまで、建築工事には欠くことのできない技能だった。これに対し、大工が仕事に掛かったのは同年12月22日、出面^{でづら}が連続するのは翌安政2年(1855)正月4日以降で、木挽より約1ヶ月遅い。

各月を3期にわけて大工と木挽の仕事量の推移をみると（図3）、まず大工は安政2年正月中旬以降一気に人数が増え、3月中旬から4月中旬に各期延べ60人を越えてピークとなる。大工は、後述のように10人の氏名が記録されているが、うち4人は安政2年8月以降しか見られず、延べ60人という人数は、残る6人が全員毎日仕事をしたことを意味する。和田家住宅は、4月14日に棟上げを迎え、その後大工の人数は激減する。棟上げまでは、「建方」と呼ぶ軸組を作る工程に当たり、この間が最も仕事量が多くなるのである。

一方、木挽は大工が仕事を始める以前、安政元（嘉永7）年11月下旬から12月下旬が延べ72.5人と多く、さらに安政2年2月下旬が19人で再びピークとなる。このように、木挽が大工より一足早く仕事量

が多いのは、木挽が材を用意して初めて大工は仕事ができるからであり、木挽が大工の工程に先んじて準備をしたことを示している。

棟上げ後、4月20日～25日(22,24日は休み)には屋根葺きが行われている。屋根屋の出勤はこのわずか4日間で、21日と23日に各32人が記録され、短期間に集中して作業が行われたことがわかる。また、左官が6月下旬から7月中旬に出ているのは外壁工事に当たり、屋根・外壁をまず完成させるのは、以後天候に左右されず内部造作を行うことができるため、現在の建築工事も同様の工程を取っている。

ところで、大工は棟上げ以降、5月4日を最後に7月中旬まで仕事がなく、同様に木挽も4月中旬から6月上旬は出勤していない。これは、5月から7月が農繁期に当たるためであり、民家の普請ではこの期間工事を休む例は多かった³⁾。

農繁期を過ぎた7月下旬以降、大工は11月上旬まで1期15名以上の状態が続く。この時期は内部の造作に当たり、10月22日以降、それまで担当していた大工に惣五郎・兼二郎らが新たに加わり、天井や欄間などの造作に限って20日ほど仕事をしている。また、畳屋は9月中旬から10月上旬と11月上・中旬、左官は11月中・下旬に仕事をしており、建具屋のみ翌安政3年3月までずれ込むものの、安政2年11月末には内部がほぼ完成したと考えられる。

なお、和田家の場合、先述の通りその後も断続的に職人の手が加えられている。まず、3年後の安政5年(1858)4月には神棚と戸袋、同年7月～8月には「上り段」と「三角」の造作を大工が行っており、「上り段」は土間と床上境の小縁、「三角」はこのうち最奥のダイドコロに面した台形の張り出しを指す。この土間と床上境は、建具屋から購入した本数から

みて、障子は安政2年の段階ですでに設置されていたとみられ、「上り段」と「三角」のみ遅れて設えられたことになる。さらに、万延元年(1860)7月に仏壇の造作と玄関の欄間の付加、文久2年(1862)正月にオクノマ脇の「奥雪隠」の増築が行われており、不急の部位、装飾的な部位が後に付加されたと推測できる。これらを除けば、和田家の普請は嘉永7年11月から翌安政2年11月のほぼ1年で完了したことになり、桁行11間半・梁間5間半という規模の大きさからみれば、むしろその期間が短いことが特筆される。

3 普請に関わる職人と村人

(1) 職人の居住地

では、これらの普請に関わった職人は、どこから仕事に來たのだろうか。

まず大工は、棟梁の亀吉を筆頭に、徳松・平助・逸作・米吉・金蔵・仙太郎・常蔵・太右衛門の8名と、内部造作の一部のみ惣五郎・兼二郎が関わる。このうち棟梁の亀吉は南湖村⁴⁾、米吉は須賀村、仙太郎は矢畑村の大工で、須賀村のみ相模川対岸だが、他はいずれも和田家から2km以内にある。これに対し、常蔵は「江戸京橋人、スカ米吉せわ」とあり、大工米吉の紹介で普請後半から加わり、同様に太右衛門も安政2年9月以降に南湖村から雇っていて、常蔵のような渡り大工が参加していることが注目される。

次に屋根屋は、先述の通り2日間に仕事が集中することもあり、32名の氏名がみられる。その居住地は、辻・今宿村・馬入村・南湖村・円蔵村・香川村・岡田村・一之宮村・西久保村・中島村・矢畑村で、和田家のある萩園村内の辻が14名で最も多く、



図1 旧和田家住宅 外観

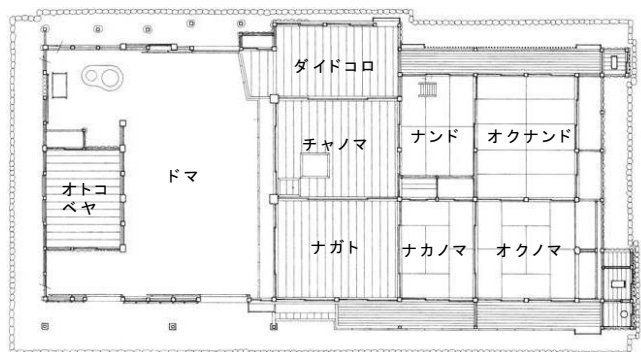
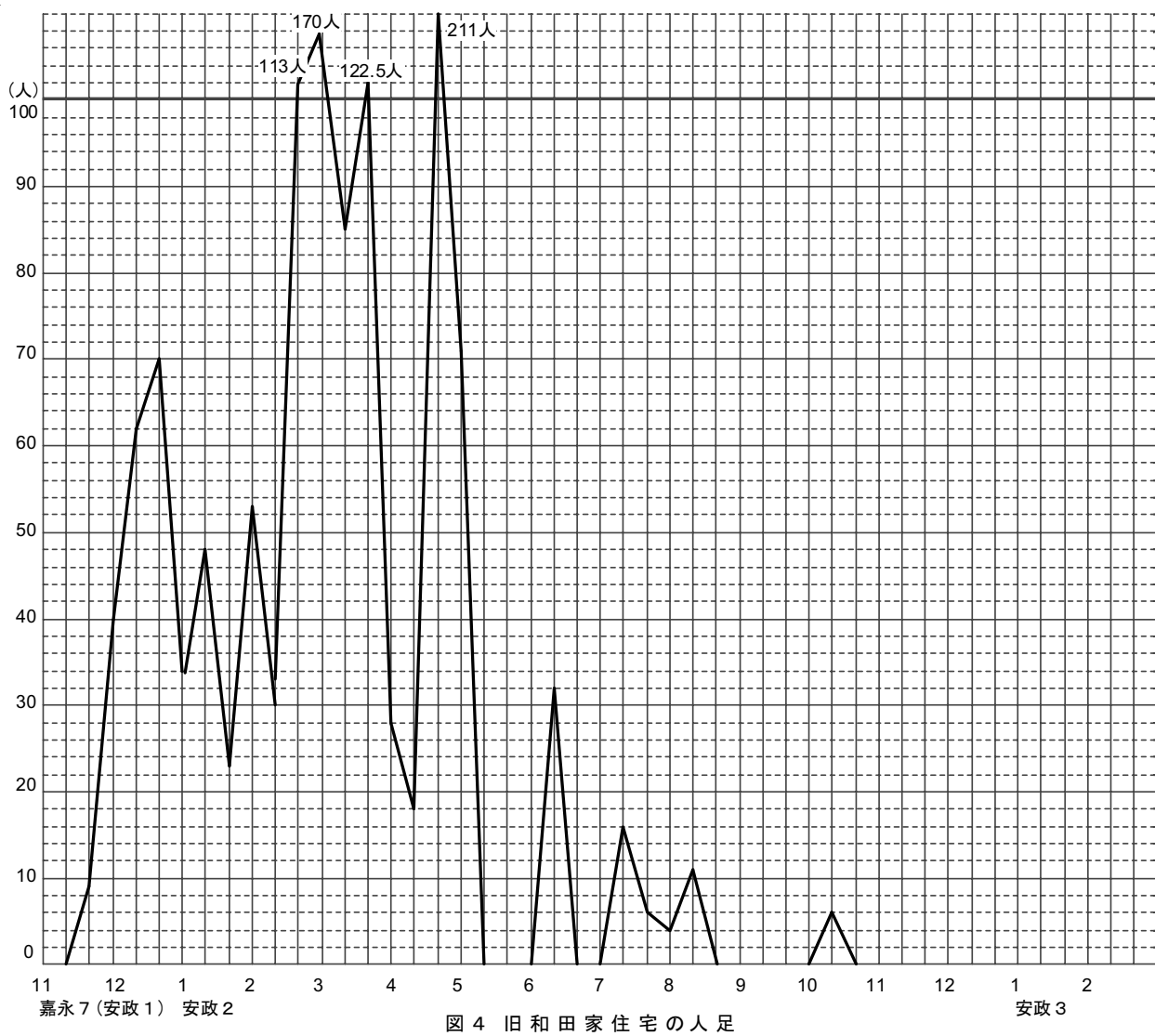
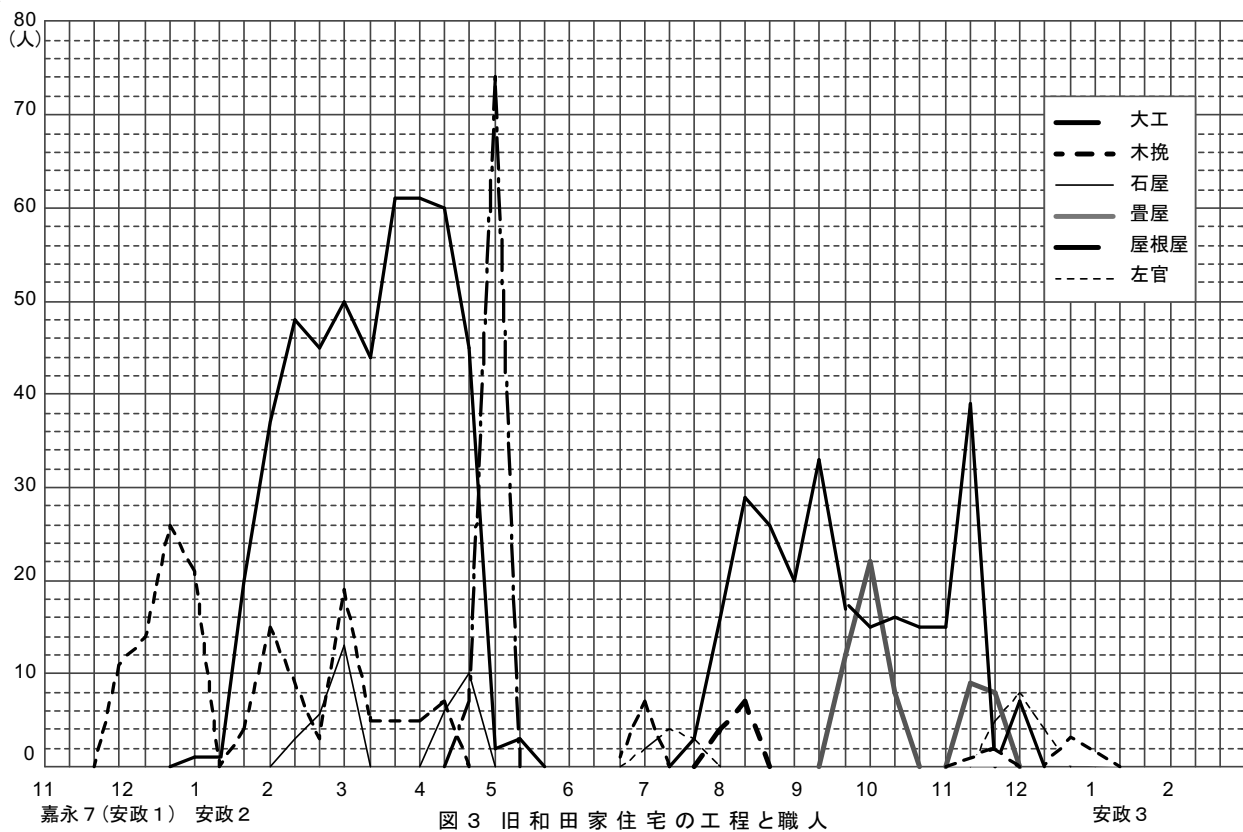
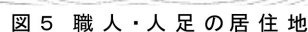


図2 旧和田家住宅 平面図



内部造作に関わる職人は、左官が須賀村の徳蔵と
中条村の松之助、畳屋が中条村の源蔵・亀次郎・定

以上の職人の居住地をみると（図5）、萩園村より東側は分布が広範囲に広がる一方、相模川の対岸は屋根屋2名と左官・石屋のみで、相模川が活動範囲の境界になっていたことが窺える。また建具屋は、伊勢松の住む下町屋村のみ萩園村に近いものの、小和田村・芹沢村は5 km 以上離れ、他の職人に比べて遠い。建具屋の場合、現場で製作するのではなく完成品を納入するため、多少遠くても支障がなかったと推測できる。



(2) 村人の関与

和田家住宅の普請では、これら職人以外に村人が「人足」として多数参加したことが、『土方人足帳』『普請人足帳』に記録されている。記録は、嘉永7年(1854)11月の材木切り出しから、竣工直前の安政2年10月に及び、延べ人数は1000人を越える。

村人の労力提供を周辺地域でみると、厚木市温水の吉岡家の享和2年(1892)の主屋普請では「助人」「人足」と呼び⁶⁾、厚木市浅間山の山口家の文化8年(1811)の主屋普請でも「助人足」と呼んでいる⁷⁾。和田家の場合、上記2冊の「人足」の記録は、氏名を記載する者と「内人足」「内」とのみ記し氏名がない者に分けられ、「内人足」は字面のみみると、氏名を挙げた人数の中の「人足」の内訳を記したものと読める。しかし、文末の人数は氏名のある人数と「内人足」の人数の合計に一致し、それぞれ別個に数えていることは明らかである。記事からは断定しがたいものの、「内人足」は和田家の奉公人から出した人足という意味と推測される。

また、近世の民家の普請帳を研究した宮澤智士氏は、新潟県等では村人の労力提供は相互扶助であるのに対し、大坂の町場などではこれらの仕事を「手伝」(てったい)と呼ぶ職能集団が有償で行い、周辺住民は建築儀礼に参加し、祝儀を包むのみだったことを指摘している⁸⁾。和田家の場合、『土方人足帳』『普請人足帳』には出面の記録があるのみで、賃金の支払いに関する記事がない。また、工事の支出を記録した『諸入用覚帳』にもそれに該当する項目がないことから、無償の労力提供とみられ、宮澤氏が報告した新潟の例に近い。ただし、工事が本格化した翌安政2年正月以降、茶や酒の支出が多くみられ、特に棟上げや屋根葺きが行われた4月には4斗の酒を購入しており、これらが人足への振舞に使われたと考えられる。

和田家住宅の普請における人足の仕事内容は多彩である(図4)。まず、嘉永7年11月19日から12月3日には、香川村(現茅ヶ崎市香川)での松の根返しと西久保村(現茅ヶ崎市西久保)での櫓の根返しに従事し、松の皮むきも行っている。木挽の記録では、西久保村での作業を「根返し手伝」と記

しており、作業の主体は人足つまり村人側にあったことになる。また、木挽が香川村に入るのは12月3日で、人足による伐採が終了してから柚立(木から材を取ること)を始めている。木材の伐採は、12月初旬に西久保村や中瀬村でも行い、年が明けた安政2年正月まで続いた。この伐採した材を運搬するのも人足で、同年12月4日に「松木香川ヨリ車ニテ引ヨセ」、12月18日に「中瀬村よりケヤキ車引」などとあり、1日に最高17人が従事し、また相模川を利用して津久井から運搬した材を、馬入の渡し付近から車で運ぶこともあった。これら材の伐採と運搬には延べ277人が携わっている。

次に、同年12月から翌年2月初旬にかけて、屋根を葺く茅の刈り取りと荷作り・運搬を行っている。和田家に用いた茅は、寺尾村・香川村・甘沼村・高田村で収穫され、延べ9日、計88人が携わった。

最も人手を要したのは地業である。当時の地業は、太い棒を落として地盤を突き固める胴突き(どうづき)という手法を採るため、大人数で綱を引く必要がある。和田家の場合、古家の取壊しや地均しのための土運び、一般に「胴突櫓」と呼ぶ胴突き用の足場の組立て(和田家では「堂組」(胴組)と呼んでいる)・取壊しを含め、2月9日から3月20日までの約1ヶ月半に419人の手が掛かっている。1日当たりの人数として最大は、胴組を行った2月25日の32人で、実際の胴突きでは1日17〜25人が従事している。このように人数が多い日は、食事や茶菓の世話をする「勝手」として女性たちも参加しており、様々な人々の手で民家が作られたことがわかる。

人足は、地業後3月下旬から4月上旬には「石屋手伝」や「礎」など、礎石を据える作業が続き、いよいよ4月中旬に棟上げを迎える。棟上げは「建前」とも呼ばれ、普請の工程では最大の行事である。和田家では、棟上げの3日前から準備のために人足の出入りが始まり、4月12日には9人、13日に49人、13日に13人が関わった後、4月14日の当日には実に人足75人と勝手方7人が記録されている。

さらに、3日後の4月18日からは屋根葺きの準備が始まる。先に、屋根屋が4月21日からの4日間しか出勤せず、特に21・23日の2日に集中する

様子をみたが、人足は職人より一足早く準備に当たり、6日間で106人が関与している。特に、屋根屋32人が出勤した4月21日には、これを上回る40人の人足が働いており、勝手の7人を加えれば、79人という大人数が和田家1軒の屋根葺きに参加したことになる。屋根葺きは、この大勢の力があってはじめて、4日という短期間で終了できたのである。

人足は、その後6月1日から6日には壁の下地となる木舞搔き（木舞を結うこと）や壁の塗り返しを行っており、単なる手伝いの範囲を越えて、実に多様な仕事に関与していたことがわかる。

(3) 人足の居住地と仕事量

以上の和田家の普請に関与した人足の延べ人数は1285人で、これを和田家住宅の延べ面積63.25坪で割ると、1坪当たり約20人となる。草野和夫氏は、明和7年(1770)から文久4年(1864)までの東北地方の民家9件について、普請帳から手伝い人足の動員を分析している⁹⁾が、その延べ人数の最大は407人、坪当たり人数は9.6人で、和田家は飛び抜けて多い。草野氏は、村人の普請手伝いは年代が下がるにつれて増大し、江戸後期には行き過ぎた手伝いで農事に支障が出ることもあり、これを戒める定書が出されたことを指摘している。地域は隔たるものの、和田家もまた幕末期の普請として、人足の動員が常態化していたのだろう。また、和田家は萩園村の村役人を務めた家柄であり、人足の従事は村落共同体としての協力だけではなく、家格に対する奉仕もあったことが窺える。

次に、人足として参加した村人の居住地をみると(図5)、辻・西町・東町・南町・上町・向町・寺町など和田家が所在した萩園村^{あざ}の字名とみられる地名のほか、今宿村・高田村・中瀬村・西久保村・中島村・南湖村・須賀村・茅ヶ崎村・大曲村・一之宮村がある。75人が参加した安政2年4月14日の屋根葺きを例にみると、萩園村内からは37人、他村の西久保村(8人)・今宿村(12人)・須賀村(4人)・中島村(4人)・一之宮村(1人)からは計29人、不明9人で、村内が多いものの、相模川対岸の須賀村まで広がる。興味深いのは、安政2年1月11日

の香川村での材木の運搬では近郷の中瀬村・西久保村の住人が人足を勤め、同様に2月5日の西久保村での松木伐採には同村の住人、2月20日の香川村・甘沼村・高田村での茅の刈り取りには高田村等の住人が従事していることで、作業場所の近隣から人足を出していたことがわかる。先述の草野和夫氏は、近隣の村からの人足の従事には、同じ領内の庄屋間での労力動員の申し合わせがあったことを推測している。和田家の場合も、他村からの人足の参加が約半数に及ぶことから、周辺村間での何らかの協定があった可能性は高いといえる。

4 材料の調達

民家は、地域の風土に根ざした建築であり、材料もまた原則として地元で入手と説明されることが多い。和田家住宅の材料調達については、『居宅普請財木買入帳』(以下、『材木買入帳』と略記)に詳しい(表1)。

和田家住宅の用材は、修理工事報告書によれば、土台は檜、床組は檜・栗・杉で、屋根を支える小屋組はほとんどが松である。また柱は、大黒柱など太い材には檜、座敷廻りの細い柱には杉が用いられ、敷居・鴨居・長押も松・杉・檜が使い分けられた。

このうち檜は、乾燥に時間がかかる樹種で、和田家ではその大部分を近隣の西久保村から調達し、工事着手の3年前に当たる嘉永4年(1852)から伐採を始めている。『材木買入帳』の最初の記録は、嘉永4年12月27日で、檜の立木5本を西久保村立野で購入し、以後嘉永5年12月までに計15本を伐採した。最も太いものは、長さが3丈7尺(約112m)、根元の径が4尺2寸(約1.3m)あり、伐採に3日、



図6 旧和田家住宅 オクノマ

人足 24 人が掛かっている。この木材を木挽が加工するのは嘉永 7 年 11 月からで、西久保村で仕事を行い、大黒柱・隅大黒柱などを木取りして、萩園村に運んだ。樺は、嘉永 7 年以降にも西久保村・円蔵村で購入しているが、量は少ない。一方、松は香川村が中心で、嘉永 7 年 11 月から翌年 1 月にかけて伐採し、杉は寺坂村（現大磯町寺坂）で調達した。

注目されるのは、立木を伐採するだけではなく、製材された木材も購入している点である。まず、津久井の牧野村・上青野原村（現相模原市藤野町牧野・青野原）からは「栗角」「杉小角」や「五寸敷居」「しふく」（地覆）、「大貫」「もみ正天井板」の購入記録があり、「角」すなわち角材や天井板・貫など部位に合わせた製品が流通していたことになる。この牧野村での購入材は、相模川を利用して運び、馬入の渡し付近から車に積み替えて和田家へ運搬している。馬入河口の須賀湊は、津久井郡牧野村や丹沢などの木材・薪の積み出し港であり¹⁰⁾、相模川による木材運搬は一般的な方法であって、川から 1 km 以内に位置した和田家は運搬に極めて有利であった。こうした製品の購入は、他にも須賀村の田中庄兵衛から杉丸太や杉の天井板、松の長押、行ヶ谷村（現茅ヶ崎市行谷）の弥右衛門から杉の戸板などの記録があり、量も多い。さらに、オクノマの床柱（図 6）の白檀を高麗寺村（現大磯町高麗）の角屋金兵衛から購入しており、銘木の流通がすでに確立していたことが知られる。和田家では、安政 3 年 9 月にも平塚新宿から楠の板 1 枚を購入しており、これは幅 3 尺 2 寸（約 97cm）という寸法で購入時期から、安政 3 年に加えられたオクノマ表側の戸袋用と考えられる。幕末期の民家の普請は、意外なほど広い範囲に用材を求め、商品流通の上に成立していたことになる。

一方茅は、先述の通り西久保村・高田村・香川村・寺尾村で刈り取り、同様に葦は松尾村・柳島村、竹は今宿村で調達して、やはり人足が伐採に出向いている。

もうひとつ、造作に欠かせない材料として釘がある。現在一般に用いられる釘（洋釘）は明治中期に日本に導入されたもので、それ以前の釘（和釘）は鉄を叩いてひとつひとつ作った。したがって、釘は

鍛冶屋に依頼して作るもので、和田家では大曲村の忠七と馬入村の市左衛門の 2 人の鍛冶屋に注文している。両者を合わせた数は、5 寸釘から 2 寸釘、さらに細い木舞釘まで計 14160 本で、複数回に分けて納品された。

5 おわりに

和田家住宅の特徴のひとつとして、オクノマなど接客空間の意匠の充実があげられ、トコや違棚の完備や、床柱・天井への銘木の使用、建具の凝った意匠など、造作の質が極めて高い点が特筆される。これらは、用材の適切な調達により実現したもので、購入先は相模川の 35km 上流の津久井にまで達し、幕末期における流通の確立の上ではじめて実現した。同時に、大工などの職人や人足など、周辺地域の人材によって作られたものでもあり、延べ 2200 人以上の人々が関わった。

和田家住宅は、地域と経済社会の両面に支えられて完成した、幕末期ならではの民家といえよう。

〈注〉

- 1) 『茅ヶ崎市指定重要文化財 旧和田家住宅移築復原工事報告書』神奈川県茅ヶ崎市教育委員会、1985 年。
- 2) 和田治彦氏所蔵。
- 3) 宮澤智士『日本列島民家史』住まいの図書館出版局、1989 年。
- 4) 『職人日記帳』『造作職人帳』には記載がないが、『諸入用覚帳』嘉永 7 年 12 月 10 日条に「なんこ 大工亀吉」とある。
- 5) 『日本歴史地名体系 14 神奈川県の地名』平凡社、1984 年。
- 6) 「普請諸色村方助人帳」吉岡一治氏蔵。『厚木の民家 3』厚木市教育委員会、1979 年、所収。
- 7) 「家普請諸入用控之帳」山口忠一氏蔵。注 6 『厚木の民家 3』所収。
- 8) 注 3 『日本列島民家史』。
- 9) 草野和夫『近世民家の成立過程』中央公論美術出版、1995 年。
- 10) 注 5 『神奈川県地名』。

* 東海大学工学部建築学科・教授

年	月日	地名	氏名	樹種	材	数量
嘉永4	12.27	西久保村	灸右衛門	樺	立木	5本
嘉永5	3.28-4.3	西久保村	八郎右衛門	樺		1本
嘉永5	11.25-12.5	西久保村	孫右衛門	樺		8本
安政1	11.13	上青野原村	与五右衛門	杉	井戸板	40枚
安政1	11.13	上青野原村	与五右衛門	樺		3本
安政1	11.11	香川村	浅右衛門	松	大梁	2本
安政1	11.11	香川村	半次郎	松		11本
安政1	11.11	西久保村	太郎右衛門	松		6本
安政1	11.21	香川村	半次郎	松		9本
安政1	12.3	西久保村	孫右衛門	松		2本
安政1	12.13	行谷村	弥右衛門	杉	仕切戸板	16枚
安政1	12.13	行谷村	弥右衛門	杉	戸板	6坪
安政1	12.23	牧野村	市左衛門	栗	角	4本
安政1	12.23	牧野村	市左衛門	栗	角	10本
安政1	12.23	牧野村	市左衛門		大貫	73丁
安政1	12.23	牧野村	市左衛門	杉	小角	20丁
安政1	12.23	牧野村	市左衛門	杉	丸太	52本
安政1	12.23	牧野村	市左衛門		5寸敷居	3丁
安政1	12.23	牧野村	市左衛門		じふく(地覆)	2本
安政1	12.23	牧野村	市左衛門	もみ正	天井板	15坪
安政1	12.28	牧野村		栗	角	7本
安政2	1.6	寺坂村		杉	丸太	17本
安政2	1.22	高麗寺村	金兵衛	白檀	床柱	1本
安政2	(1月末)	須賀村	田中庄兵衛	杉	丸太	24本
安政2	(1月末)	須賀村	田中庄兵衛	杉	丸太	54本
安政2	(1月末)	須賀村	田中庄兵衛	小竹		10束
安政2	2.8	今宿	西寺	竹		22本結×2束
安政2	2.8	今宿	西寺	ほこ竹		48本結×1束
安政2	2.26	西久保村	八郎右衛門	樺		1本
安政2	2	西久保村	太郎右衛門	松	ナゲハリ	2本
安政2	2.30		大工亀吉	松	差物	1丁
安政2	2.30	香川村	半次郎	松	差物	1丁
安政2	3.7	香川村	一之宮村建具屋	松		1本
安政2	3.29	須賀村	田中庄兵衛	松		30本
安政2	3.29	須賀村	田中庄兵衛	杉	天板	36枚
安政2	4.6	須賀村	田中庄兵衛		貫	30丁
安政2	3.5	須賀村	中村安兵衛		並がんぎ	29本
安政2	3.5	須賀村	中村安兵衛			46本
安政2	3.28	須賀村	中村安兵衛		並がんぎ	46本
安政2	3.28	須賀村	中村安兵衛			26本
安政2	3.23	須賀村	中村安兵衛	石		1本
安政2	4.13	須賀村	中村安兵衛	杉	板	4坪
安政5	7.21	須賀村	中村安兵衛	下田三尺		41本
安政2	4.5	中島村	高兵衛	女竹		1束
安政2	4.11	大曲村	鍛冶屋		中結釘	50本
安政2	4.11	大曲村	鍛冶屋		5寸釘	200本
安政2	4.11	大曲村	鍛冶屋		4寸釘	200本
安政2	4.11	大曲村	鍛冶屋		2寸釘	1000本
安政2	4.13	大曲村	鍛冶屋 忠七		5寸釘	200本
安政2	4.13	大曲村	鍛冶屋 忠七		中結釘	100本
安政2	4.13	大曲村	鍛冶屋 忠七		2寸釘	300本
安政2	5.30	大曲村	鍛冶屋 忠七		小舞釘	1000本
安政2	6.3	大曲村	鍛冶屋 忠七		2寸釘	200本
安政2	7.6	大曲村	鍛冶屋 忠七		3寸釘	1000本
安政2	7.6	大曲村	鍛冶屋 忠七		大5寸釘	200本
安政2	7.6	大曲村	鍛冶屋 忠七		3寸釘	200本
安政2	7.6	大曲村	鍛冶屋 忠七		4寸釘	500本
安政2	7.6	大曲村	鍛冶屋 忠七		3寸釘	1000本
安政2	10.4	大曲村	鍛冶屋 忠七		3寸釘	400本
安政2	10.13	大曲村	鍛冶屋 忠七		3寸釘	200本
安政2	10.13	大曲村	鍛冶屋 忠七		5寸釘	100本

年	月日	地名	氏名	樹種	材	数量
安政2	10.25	大曲村	鍛冶屋 忠七		3寸釘	1000本
安政2	4.17	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		4寸釘	1000本
安政2	4.17	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		3寸釘	1000本
安政2	4.17	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		2寸釘	1000本
安政2	4.17	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		中結釘	100本
安政2	4.17	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		中結釘	100本
安政2	4.17	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		大5寸釘	400本
安政2	4.18	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		3寸釘	1000本
安政2	4.18	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		大5寸釘	400本
安政2	5.4	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		古釘	60本
安政2	8.8	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		手連？釘	60本
安政2	8.8	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		手連？釘	200本
安政2	4.21	一之宮村	大工 平助	上物古竹		162本
安政2	5.4	馬入村	内田勘助		屋根板	10束
安政2	5.4	馬入村	内田勘助	杉		1枚
安政2	9.8	馬入村	内田勘助	杉	板割	1枚
安政2	9.8	馬入村	鈴木晴右衛門	杉	4分板	2坪
安政2	6.3	須賀村	田中庄兵衛	松	角	1本
安政2	6.3	須賀村	田中庄兵衛	杉	板割	20枚
安政2	6.3	須賀村	田中庄兵衛	松	長押	15丁
安政2	8.6	須賀村	田中庄兵衛		貫	56丁
安政2	11.3	中条村	源蔵		備後表	8枚
安政2	11.3	中条村	源蔵		地やり	1枚
安政2	11.3	中条村	源蔵		板	14枚
安政2	11.3	中条村	源蔵		2寸小刺	10本
安政2	11.3	中条村	源蔵		2寸小刺	10本
安政2	6.1	甘沼村	饅頭屋	松	立木	3本
安政2	6.1	甘沼村	饅頭屋		引割板	153枚
安政2	4.9	小和田村	吉左衛門	松	引据	1丁
安政2	4.9	小和田村	吉左衛門	松	引据	1丁
安政2	4.9	小和田村	吉左衛門	松		1丁
安政2	4.9	小和田村	吉左衛門	松		1丁
安政2	4.13	小和田村	吉左衛門	松	引据	2丁
安政2	4.13	小和田村	吉左衛門	松	引据	2丁
安政2	4.13	小和田村	吉左衛門	松		1丁
安政2	4.13	小和田村	吉左衛門	松	引据	1丁
安政2	8.27	小和田村	建具屋与五郎	杉	戸板	4枚
安政2	10.13	小和田村	建具屋与五郎		障子	11枚
安政2	10.13	小和田村	建具屋与五郎		障子	4本
安政2	10.13	小和田村	建具屋与五郎	杉	切仕戸	3本
安政2	10.13	小和田村	建具屋与五郎		押入半戸	6本
安政2	10.13	小和田村	建具屋与五郎		障子半戸	4本
安政2	10.13	小和田村	建具屋与五郎		ふすま	4本
安政2	10.13	小和田村	建具屋与五郎		障子	4本
安政2	8.14	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		2寸釘	500本
安政2	9.2	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		3寸釘	1000本
安政2	9.2	馬入村	鍛冶屋 市左衛門		4寸角鋸	2丁
安政2	12.27	町屋村	鍛冶屋		2寸釘	500本
安政3	4.5	町屋村	鍛冶屋		2寸釘	300本
安政3	4.6	町屋村	鍛冶屋		2寸釘	500本
安政3	4.11	町屋村	鍛冶屋		2寸釘	200本
安政3	9.3	新宿		楠	板	1枚
安政3	9.3	高麗寺村	角屋金兵衛	杉	4分尺板	30枚
安政3	10.9	岡田村	宝塔院	樺		1丁
安政3	10.9	岡田村	宝塔院	樺		1丁
安政3	10.9	岡田村	宝塔院	樺		1丁
安政3	10.10	小和田村	吉左衛門	松	長押	1丁
安政3	10.10	小和田村	吉左衛門	松	角	1丁
安政3	11.3	伊勢原	西村高兵衛		2間棹	22本
安政3	11.3	伊勢原	西村高兵衛		2間半棹	10本

表 1 材 料 の 調 達